

第 179 回九州大学眼科研究会 抄録

1. CTNNB1 遺伝子変異を有する症候性家族性滲出性硝子体網膜症の臨床像 (成瀬 翔)

家族性滲出性硝子体網膜症 (FEVR) は網膜血管の形成不全を生じる遺伝性疾患である。症候性 FEVR で CTNNB1 変異を有する症例を経験した。全例両眼とも周辺部無血管や鎌状ひだ等の FEVR 所見を認め、小頭症と発達遅滞が共通する全身所見であった。全例 de novo 変異で、併存する遺伝子異常により臨床像が複雑化している症例もみられた。CTNNB1 遺伝子変異より全身異常と FEVR を認めた国内初の報告である。

2. シリコンオイル下で自然閉鎖した黄斑円孔の 1 例 (中間崇仁)

黄斑円孔は硝子体手術後早期に閉鎖が確認出来ることがほとんどで、術後しばらくして閉鎖することは珍しい。今回、裂孔原性網膜剥離に対する硝子体手術時に形成した医原性黄斑円孔が、シリコンオイルタンポナーデ後 1 ヶ月では閉鎖せず、術後 2 ヶ月で自然閉鎖した症例を経験したので報告する。病態ははっきりしないが、シリコンオイルタンポナーデが術後しばらくしてからの黄斑円孔閉鎖に寄与した可能性がある。

3. 当院受診中の糖尿病透析患者の眼合併症 (山名泰生)

糖尿病透析患者 (DDP) では糖尿病網膜症 (DR) と網膜静脈閉塞 (VO) が重要である。また腎症患者 (DP) では貧血が問題になる。当院受診中の DDP の DR と VO について検討した。DP 貧血治療剤エリスロポイエチン製剤による高血圧で発症した VO の 1 症例と、透析開始で糖尿病黄斑浮腫 (DME) が一旦軽快したが腎性貧血に対する経口治療薬 HIF-PH 阻害薬投与により DME が再発した 1 症例について報告する。

4. 網膜動脈閉塞症と全身合併症 (清原鴻平)

【目的】当院における網膜動脈閉塞症と全身合併症の関連性について報告する。【対象と方法】最近 9 年間に当院で診断された網膜中心動脈閉塞症 (CRAO) および網膜動脈分枝閉塞症 (BRAO) 患者 48 例 48 眼を対象とし、受診までの時間、治療法、全身合併症について後ろ向きに検討した。【結果】全身合併症は高血圧が最も多く、次に頸動脈プラークと脳梗塞が多かった。【結論】RAO は全身合併症のリスクが高く、内科との連携診療が重要である。

5. 流涙症患者の点眼造影 CT の所見分類について (鈴木 亨)

2020年10月から2021年9月末までに当院を受診した流涙新患172名222例のうち、198例でコーンビームCTを用いてCT涙道造影点眼法(点眼造影CT)を施行した。患者の両眼にオムニパーク140を1滴ずつ点眼し、自然瞬目を続けさせた。5分後に閉瞼させ、座位のまま撮影した。その評価は、造影剤が涙道に全く見られないno pick up, 涙嚢に到達していないpre-sac delay, 鼻涙管下部に到達していないpost-sac delay, 鼻涙管下部まで到達したno delayの4つに分類可能であった。

6. COVID-19 ワクチン接種後に角膜移植後拒絶反応を来した DSAEK の 1 例 (音田佳代子)

【緒言】COVID-19 ワクチン接種後に角膜移植後拒絶反応を来した DSAEK の一例を報告する。

【症例】80歳女性。右水疱性角膜症に対して2021年6月に DSAEK を施行した。8月28日に二度目の COVID-19 ワクチン接種を受け、その後右視力低下が出現、角膜移植後拒絶反応と診断しステロイド全身投与を行ったが、移植片不全に至った。【結論】COVID-19 ワクチン接種後には DSAEK など拒絶反応のリスクが低い症例でも拒絶反応が生じることがあり、早期発見に努めることが重要である。

7. 造血幹細胞移植後、移植片対宿主病と免疫回復ぶどう膜炎を同時に発症した遷延性 (姫野夏季)

【緒言】同種造血幹細胞移植後に、免疫回復ぶどう膜炎(IRU)と移植片対宿主病(GVHD)を同時に発症したサイトメガロウイルス(CMV)網膜炎を経験したので報告する。【症例】23歳男性。2020年にHodgkinリンパ腫を発症し、化学療法開始後CMV網膜炎を発症し遷延していた。造血幹細胞移植2か月後、網膜病変の増悪と高度の虹彩炎、皮膚GVHDを同時に発症し、抗ウイルス薬硝子体内注射、ステロイド点眼・内服により前後眼部病変は改善した。【結論】移植後免疫能の回復に伴いIRUとGVHDを同時に発症したと考えられた。CMV関連眼疾患は、様々な病態を呈することから、患者の免疫状態を考えながら診療することが重要である。

8. 九州大学病院における白内障手術併用 iStent inject W 挿入術の術後成績

(筒井紘樹)

【目的】iStent inject W 挿入術の当科の術後成績を報告する。

【対象】対象23例33眼、病型はすべてPOAGで術前、術後の眼圧・点眼数を評価した。

【結果】平均術前眼圧は15.0mmHg、平均術前点眼数は2.8剤であった。術後6ヶ月の平均眼圧は13.5mmHg、平均点眼数は1.0剤であった。

【結論】iStent inject W 挿入術は低侵襲の手術で、眼圧下降や点眼数の削減につながる治療法であった。

9. 感染性角膜炎カレンダーの試作 (山田直之)

【目的】感染性角膜炎の月毎の原因微生物を示した「感染性角膜炎カレンダー」を作成する。

【対象と方法】2006年4月から2020年1月までに加療した感染性角膜炎472眼を対象とした。

【結果】発症数は3, 10月の2峰性で, 1~6月はHSV, 7月アメーバ, 8月緑膿菌とカンジダ, 9月緑膿菌とHSV, 10月CMV, 11月HSV, 12月コリネバクテリウムが最多であった。

【結論】感染性角膜炎カレンダーを作成した。

10. 裂孔原性網膜剥離の発症を契機に増殖糖尿病網膜症と診断された2例 (橋本佳典)

裂孔原性網膜剥離の発症を契機に, 増殖糖尿病網膜症と診断された2例を報告する. 症例1. 右眼の視神経乳頭の鼻下側の限局性網膜剥離. 広角OCTにて新生血管の近傍に網膜硝子体癒着, 硝子体牽引, 網膜裂孔を認めた. 症例2. 左眼の黄斑部を含む陳旧性網膜剥離, 広角OCTにて増殖組織の近傍に網膜裂孔を認めた. 増殖糖尿病網膜症に伴う網膜裂孔は深部裂孔が多く, 検眼鏡的に検出困難で, 裂孔検出には広角OCTが有用であった.

11. 九州大学病院における血管新生緑内障に対するチューブシャント手術の成績

(山口宗男)

目的: 血管新生緑内障(NVG)に対する初回チューブシャント(アーメド緑内障バルブ)手術の術後成績を報告する. 対象と方法: NVGに対してチューブシャント手術を施行し3ヶ月以上経過観察できた12例12眼を対象とし, 術前後の視力眼圧, 緑内障点眼本数について検討した. 結果: 術前と比較して術後経過観察期間中, 有意に眼圧下降, 緑内障点眼本数を減少できた. スパイク状に眼圧上昇した5眼に対してはtPA前房内投与し, 眼圧下降を得た. 結論: NVGに対するチューブシャント手術は良好に眼圧を下降させた.

12. 強膜炎治療中に多様な臨床症状をきたした再発性多発軟骨炎の1例 (小野大地)

諸言: 強膜炎治療中に全身状態が悪化し, 再発性多発軟骨炎の診断に至った一例を報告する.

症例: 67歳男性. 両眼の充血, 高眼圧で当科へ紹介となった. 頭痛や耳介腫脹, 皮疹, 盗汗が出現し, 近医膠原病内科へ紹介となった. その後, 高熱, 発声障害, 難聴, 四肢の痺れをきたし, 再発性多発軟骨炎の診断で全身ステロイド投与を行った.

考按: 強膜炎の精査にあたり, 本症を疑った場合には膠原病内科と連携し, 早期診断・治療につなげることが重要である.